

第2回 柔道整復学科モンゴル海外研修に参加して

木村直明

去る平成25年9月11～16日まで、本学柔道整復学科の久米信好准教授・小山浩司准教授の引率で、2・3年生7名の有志学生で第2回モンゴル海外研修へと旅立った。

私は第1回目に引き続き、2回目の参加となった。モンゴルでは、日本の伝統医療である柔道整復術が普及しつつあり、その技術を学んで医療者になった者の数も多くなっている。

旅の初日、私たちは成田空港の第1ターミナル南ウイングHカウンターの前に集合した。Hカウンターは国際ターミナルの端の端にあり、これから訪れるモンゴルという国に対する外からの印象を物語っているようであった。参加した学生の中には、海外旅行が初めという学生も多く、これから始まる体験に不安と期待を抱きながら私たちは飛行機に乗り込んだ。5時間30分のフライトを経て、モンゴルの首都ウランバートルのチンギスハーン国際空港へと到着した(図1)。蒸し暑かった日本と比べ、冬の時期に入ったモンゴルの寒さは私たちの肌に風が突き刺さり、荒ささえ感じる歓迎であった。

空港から滞在するホテルへと車で走る中、ウランバートル市内に入るまではほぼ一本道で、その窓から見える景色に住宅はなく、緑の少ない山々と広大な草原という景色だった。道路はあまり舗装されておらず、上下左右に大きく体を揺らされることで、飛行機の疲れが倍増した。ホテルで各々の部屋に別れ、夕食まで荷物を整理していると、鍵のかかった学生の部屋に何者かがガチャガチャとドアノブを回す強い音がした。渡航前の説明で、鍵を閉めていないと危険であるとは聞いてはいたものの、実際に体験した学生は恐怖を実感していた。ホテルでの食事は想像を裏切り、美味しく安心して食べることができた。前回のモンゴル研修で地方に行った際、その付け合わせの野菜で参加者のほとんどが下痢を発症したことがあり、モンゴルの野菜は鬼門であったが、2年の月日が流れ安全に生産された野菜となっていた。モンゴルでは法律で10月になるまで暖房が室内に入らないため、部屋の中は寒く、シャワーからは水しか出ない部屋、逆に熱湯しか出ない部屋と皆苦勞させられた。



図1 チンギスハーン国際空港



図2 エコーの画像を見つめるモンゴルの学生

2日目、この日は朝からこの研修のメインともいえるべき、国立モンゴル健康科学大学との交流が始まった。学長先生たちから歓迎を受け、学内を見学した。驚いたことに、前回よりもだいたい設備が充実されていた。アメリカからのミレニアム チャレンジという援助を受け、細胞や菌、血液などのバイオメディカルの研究に力を入れていることが理解できた。その後、モンゴルの学生たちと一緒に講義を受けた。その中で感じたことは、モンゴルの学生の勤勉さである。講義中の私語はほとんどなく、先生からの質問に対して積極的に答え、多くの質問を先生に投げかける姿を見て、見習わなくてはと痛感した。初めにモンゴルの医学教育部長のバイガル先生から、モンゴルにおける外傷と柔道整復術の必要性について講義を受けた。午後の久米先生の講義の前にはモンゴルの学生たちと一緒にラジオ体操を行った。今回の授業は、モンゴルの学生たちの班に私たちが一人ず

つ入り、グループで勉強する形を取ったが、この体操で各々の緊張が解けた。久米先生の授業は、まず日本から持参した超音波画像観察装置(エコー)を用いた、骨・関節・軟部組織に対する超音波についてであった。私たち以上にモンゴルの学生たちは興味津々な眼差しで映し出されるスクリーンの画像を見ていた(図2)。

久米先生の提案でモンゴルの学生が怪我をした部位を観察した。まず、観察してほしいと手を上げる学生たちの多さを見て驚いた。そして観察した3名の学生とも外傷で手術の経験があり、全て変形治癒などの後遺症が確認でき、再び驚かされた。この光景を見て私が思い出したのは、久米先生が講義などでよく言っている“モンゴルで出会った11歳の少女”の話だ。上腕骨顆上伸展型骨折で、転位したまま変形治癒し、肘が動かせない子供だ。このままでは、この子は将来自分の子供を産んだとしても、抱くことさえできない。この少女との出会いから、もう何年も経つが、現在でもこのような問題があるのかと実際に見て胸が痛くなった。



図3 足関節捻挫のテーピング実技

引き続き、久米先生がモンゴルでも多い外傷の1つということで、足関節捻挫についての講義が始まった。モンゴルでは足の捻挫で治療を行うことは稀なようで、モンゴルの学生たちにとって、とても新鮮に感じられたようであった。この講義では徒手整復やテーピング固定などの実習があったため、私たちがテーピング固定の経験がある学生は、言葉は通じないがモンゴルの学生たちに教えながら学生間の交流が図れた(図3)。

3日目はモンゴル国立外傷病院と伝統医療病院の見学を行った(図4)。外傷病院は入院患者でベッドは満床。さらに驚いたことに廊下に布団を敷いて入院している患者もいた。外傷病院の設備や衛生状態はお世辞にも良いとはいえなかった。私たちはいくつかの病棟を見学した。その中で、教科書には記載されていても、日本の接骨院では実際に体験することができなくなった骨折の事例を見ることができ、自分が柔道整復師になってからの活動の、良い経験になった。伝統医療病院では、日本では見たことがないモンゴルの伝統的な治療方法を見学できた。薬草や岩塩など初めて見る新鮮なものだった。



図4 国立外傷病院(左)と伝統医療病院(右)

この日の夜、私たちはモンゴル流の“おもてなし”を受けた。モンゴルの伝統舞踊のコンサートに招待してもらった。モンゴルの歴史的な歌や馬頭琴の音色はとても澄んでおり、心身ともに癒された(図5)。

4日目、朝早くにホテルを出発し、私たちはウランバートルを離れて地方へと車で向かった。車で30分ほど走るとウランバートルのビルだらけの景色は一変し、モンゴルの大自然であった。途中、全長68メートルのステンレス製の巨大なチンギスハーン像を見学した(図6)。モンゴルという国の礎を作った英雄の像の中はミュージアムとなっており、モンゴルの歴史を知ることができた。その入り口にはカザフスタン人の鷹匠がおり、皆で腕や肩に鷹や鷺を乗せて記念撮影を行った。

次に向かったのは移動式住宅のゲルである。実際に生活しているゲルを借り、伝統的な生活について体験した。ゲルに着いた私たちはいきなり衝撃的な光景を目にした。それはナイフ1本でたった今殺した羊を捌く光景だった。この羊を私たちが食べるのだ。これは“ホルホグ”という伝統的な料理で、羊の内臓と血、肉の塊を野菜や塩とともに牛乳缶に入れ、焼いた石と交互に詰めて蒸し焼きにしたも



図5 伝統舞踊コンサート



図7 伝統料理、ホルホグ調理中



図6 巨大なチンギスハーン像



図8 旧日本兵の銃剣

のである(図7)。

モンゴルに来てから中華料理や韓国料理などを食していたが、ある意味、初めてモンゴルらしい料理を食べた。ホルホグの他にも15リットルの馬乳酒もいただいた。学生の中には口に合わず、つらい思いをし、残してしまう者もいた。ホルホグを食べる礼儀作法は“骨に付いた肉まで残すことなくナイフで削ぎ取り、綺麗に食べること”であった。折角もてなしてもらったのに失礼なことをしてしまった。

ゲルの中で、珍しいものを見せてもらった。錆びついた銃剣であった(図8)。これをよく見ると菊の紋章が入っており、漢字で名前のようなものが刻まれていた。これは、旧日本兵のものであり、これは遠い昔、日本とモンゴルとの間に戦争があったことを物語っており、海外研修では歴史的な背景というものも勉強していかなければならないと考えさせられた。

ゲルの外では乗馬を体験し、普段より高い目線で大自然の景色と風を堪能した。ゲルでの楽しいひとは時間を忘れさせるほどで、私たちは急いでホテルへ向かったが、モンゴルという慣れない異国の地での緊張で疲れたのか、気付いたら、そこはホテルという具合にぐっすり寝ってしまった。

5日目は市街地を見学した。初めにラマ教の寺院を訪ね、特有のマニ車

を回し、旅の無事と立派な柔道整復師になれるよう祈った。買い物をした後、私たちはある民家へと赴いた。そこにはベッドに横たわる80歳の女性がいた。大腿骨頸部骨折で寝たきりの状態であった。心臓に器質的疾患を持っているということで、手術はできないと判断されたようだ。久米先生が術者、小山先生と3年生が助手となり、ご家族の強い希望にて徒手整復と外固定を行なった。私たち学生にとって、初めての体験であった。固定を終えると、「とても楽になった」という言葉と穏やかな表情、そしてご家族からの感謝が忘れられない良い経験となった。これこそ、医療の原点なのだと改めて感じた。

6日目、早朝ホテルをチェックアウトし、空港へ向かった。しかし、そこでこの旅で最大の事件が起こった。8時フライト予定の飛行機が飛ばないのだ。日本に上陸した台風が関東を直撃したためだ。予定は変更され11時、更に14時、15時となり、我々も不安を隠しきれなかった。突然、15時30分頃に搭乗口に案内され、免税店で買物をする暇さえなく飛行機に乗り帰国の途についた。成田空港に到着した時間はすでに21時を過ぎており、全員疲労困憊状態であったが、“おかえりなさい”という言葉に心身ともに癒された。

今回の海外研修で私は、モンゴルの医療の現状を深く学ぶことができた。そして教科書だけでは学ぶことができないことを沢山経験することができた。これは、私がこれから柔道整復師になるにあたり、かけがえのない財産となるに違いない。また、同級生や後輩たち、先生方と更なる絆を深めることができた。最後に、このような機会を作っていた本学の先生方、モンゴルでサポートしてくださった方々、一緒に研修を行なった仲間たちに感謝をしたい。そして、いつかまた、このような機会があれば是非参加したい。この経験を参加していない同級生や後輩たちにもしてほしい。今回の研修を終え、これからの大学生活をどう過ごすかを見直し、理想的な柔道整復師になれるように精進していきたい。